

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にもどのような稀観本（きこうぼん）

本館

稀

観

本

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されているかがある。ついでには、ご専門のお立場から本館所蔵の稀観本をご紹介いただく

の中から

紀州徳川家旧蔵衣裳図録 上・下2帙

文化女子大学教授 遠藤 武

和半紙に筆で原図を描き、ときには、彩色を施して構図の美しさを表現した江戸末期の衣裳雛形である。10じょう（帖）を折本仕立にして五帖ずつをちつ（帙）に収めたものである。

紀州家（和歌山県和歌山市）は、尾張・水戸両家と共に徳川御三家の一つであり、戦前は、レコードの収集家としても有名であり、南紀文庫も古典書籍の上で（斯）界に名をとどかしたものであるが、家運の衰退に伴い、いろいろの所蔵品は分散し、染織調度方面でも、尾張家と共に豪華な作品を所蔵されていたが、今は、東京国立博物館をはじめ、私立博物館や好事家の手に帰している。本学が、この図録を所蔵するに至ったのも、昭和37年1月の東京美術倶楽部での入札で、木内書店から購入したものである。

紀州家の染織品は、尾張家のそれと共に茶屋染における一方の雄であり、江戸中期以降のゆい（由）緒ある打掛・帷子などの遺品は、かなりの量、昭和10年代に東京博物館の収蔵品となった。

この図録の内容は、1帖から5帖までの上帙に収められている図がら（柄）は、一つ身・四つ身・打掛・帷子類の様子がてん（貼）附され、ことに、1～2帖には、一つ身・四つ身類が多く、3～4帖は、打掛や帷子類、5帖は、各種の混じりである。打掛・帷子の類には「御中もやう」といって18世紀にはや（流行）った腰高模様より少し低めのものが多いのは、帯を結ぶことによって背と腰を二分するため、中もやうは、帯より下に現われるのを普通とする。

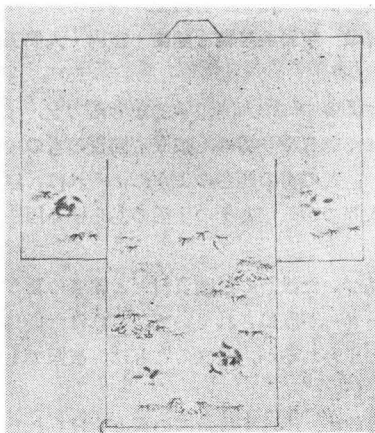
さて、下帙に収められている6帖以下は、役羽織と伊達羽織類で公辺筋に用いるものには、葵文をいろいろの形で

つくり、それに立涌模様をあしらったり、向い鶴菱に葵菱続にしたり、中には驚くほど斬新な構図でつくりあげた作品もあった。このほか鷹狩や鳥追などの際に用いる伊達羽織は、切竹、立涌に藤、三崩し、疋繫ぎ、檜垣などを表・裏・小紋・色替など、さまざまな形で用いられた。ことに注目をひくのは、上帙の小袖の中に、茶屋染の中で特に、紀州茶屋といわれる模様配置が、たくさんに組みこまれていることで、打掛の構図にある鯉流のぼり模様は、現今、それと同じ構図の徳川種姫の遺物があるだけに、われわれに興味深い問題を投げかけてくれるのである。つまり、雛形と遺物が符合する例は、非常に珍しいからである。また、紀州家の衣裳図録と世上に流布した版本としての雛形本の大きな相違は、版本は、書冊を開くと、まず、衣服の構図があって、その脇に「秋の野はぎすすぎ」と題して、

地白、雲はむらさきとのちや、はぎすすぎ金銀のいでい（泥）さいしき（友禪ひいながた巻一）

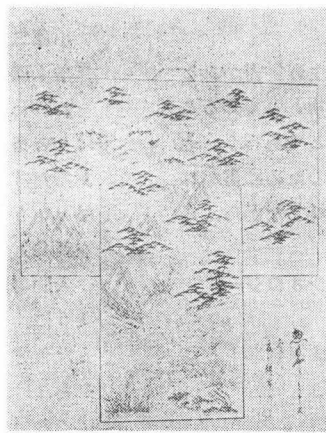
など、染色・文様が細かく書きしるされ、ときに、縮緬・縷子など、地質まで記入されている例さえある。ただ、紀州家のものは、図柄だけで、一つ身や羽織に彩色したものがあるくらいで、ときには、お姫様など着用者の身分を書きしるしたものも、二、三あるにすぎない。

版本として、衣裳雛形が最初につくられたのは、1667年（寛文7年）の「新撰ひいながた」という半紙半せつ（載）の2冊本である。もちろん、これ以前にも万治4年（1661）に雁金屋の図案帖というのがあった。これは、今日、大阪市立美術館に、寛文3年（1663）の図案帖と共に収蔵されている貴重な書籍で、尾形光琳筆の伝承をもつものである。



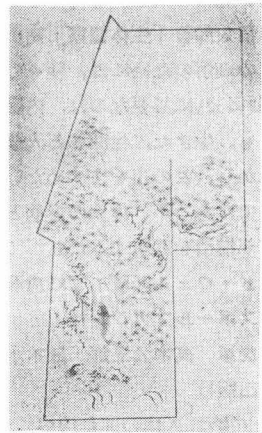
四つ身裁（幼児）雛形

雪ばれの日に、こいぬ（仔犬）が楽しそうに戯れている、ありさまを描いたのが特色になっている



松籟網干海浜模様振袖雛形

海辺の松の木の間から、あほし（網干）が見られるという紀州の国がら（柄）がしのばれる優美な構図



鯉滝登り腰高模様振袖雛形

江戸末期に近い染・織・繻の技術が共にすぐれた作品で、今日、国立東京博物館に保存されている

これは地質・染色・文様が明細にしるされ、美濃半紙二つ折の帳面仕立で、ところどころに〇〇宮様、××姫様御用などと、その注文者がしるされてあり、研究者の目をそばだたせるものばかりである。いずれにせよ、江戸の明暦大火以後のものである。

桃山時代のけんらん(絢爛)豪華な縫箔・摺箔に絞をあし  
 った大名や戦国武将の小袖は、武弁殺伐な江戸時代初期  
 においても、その影響は、金力の豊かさとともに婦人の世界  
 であった。それが、参きん(観)交代制度の確立によって、大  
 名諸侯の婦女は、江戸住まいとなり、日暮門—陽明門をも  
 って將軍を迎える大名屋敷門も、明暦の江戸大火でう(烏)  
 有に帰してからは、急きょ(遽)その注文は、必然的に消費  
 都市江戸を離れて生産都市の京都に集中された。今までの  
 精ち(緻)な手段による豪華さだけでは急場をしのごことが  
 できなくなり、大胆にして斬新な構図へと切り替えざるを  
 得ない事情に迫られ、その注文見本帖的なものが、刊本の  
 衣裳雛形として真筆本に代わって登場したことは当然とい  
 わねばならない。それが「新撰ひいながた」なのである。

そればかりか、寛文末から延宝初めにかけて町人の経済  
 力は、天災地変や貨幣流通の普及に伴って豊かとなり、そ  
 れにつけても、従来の一時的な斬新さだけでは物足らなさ  
 が先となり、しだいにぜい(贅)をつくすような加工が喜ば  
 れ、衣裳雛形の上にも、歴然とこの傾向が現われ、しだいに  
 幕府のしゃし(奢侈)禁令の対象ともなっていた。いず  
 れにせよ、名もなき画師のかいた雛形本にも、元祿以降に  
 は、菱川師宣や西川祐信さえもが、これに筆を染めるとい  
 うふうで、尾形光琳から出て光琳の秋草模様が、一世を風  
 び(靡)するというぐあいであった。

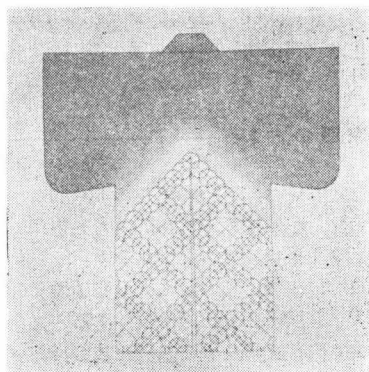
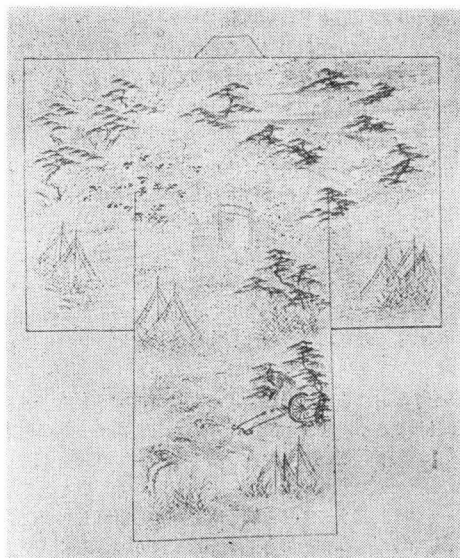
概して、元祿以降の衣裳雛形は、武家のためよりも町人  
 を対象としたものが、その中心であった。それというのも  
 武家服飾には、一つのしきたりがあって、それから抜け出  
 ることをきらったからで、たとえ、染物屋が、それを参考  
 するようなことはあっても、それを全面的にとり入れるこ  
 と事態はなかった。ましてや、大名、ことに御三家ともな

ると、なおさらのことで、従来は、南紀徳川史第16冊=服  
 制に収められているものが、徳川家の服制を知る最良書と  
 いわれていた。それほど南紀徳川史のものは、詳細を窮め、  
 その挿絵と共に、研究者にとって松平春岳の幕儀参考と同  
 様、座右に置かねばならぬものであった。

本学所蔵の紀州徳川家旧蔵衣裳図録上下2帙は、南紀徳  
 川史編纂の土台となった資料だけに、未発表のものも多く、  
 ときに、配列に不適合のものがないではないが、それは、今  
 後、この方面の研究者によって是正されるべき問題で、私  
 見を言うならば、服飾研究者ばかりでなく、伊達羽織のデ  
 ザインのあり方に注目されて、わが国の古い伝統の中にも、  
 すばらしい斬新さがあるのは、室町・桃山時代の陣羽織ば  
 かりでなく、あまりにも身近にあることを忘れないことを  
 望みたいものである。

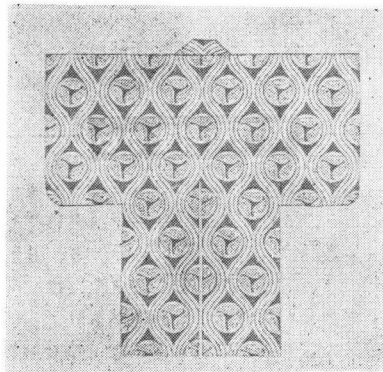
いずれにせよ、本学の稀少価値と貴重という点で、まず  
 第一に推賞したい庄巻の書冊であると信ずる。

茶屋染総模雛形 邸内と御所車を配して水辺のあし(芦)の間  
 から網干が見える風景は、紀州家で好んで衣裳の構図としたと  
 ころからきくまがき(菊雛)の尾張茶屋に対して紀州茶屋という



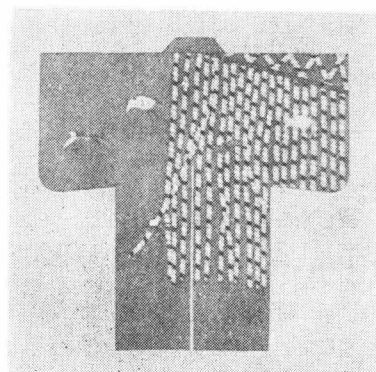
かわりつめたもん  
 替詰田文伊達羽織

田の字を左右上下に配列した詰田文の変形  
 で伊達羽織として腰下に構図したのが特色



あおいたでわくもん  
 葵立浦文伊達羽織

立涌という装束文に紀州家の葵紋を分割変  
 形し、奇抜な図柄を構成しているのが特色



ひえん  
 飛燕模様伊達羽織

のれんに飛燕という初夏を思わせる大胆な  
 構図をまとも上げ伊達羽織としたのが特色